

EurekaXIII

六年制通信 No.9 令和7年5月29日(木)号

生命は

No.6で『アリアドネの声』を紹介しましたが、もう読んだかな。あの本の中に9歳で失明し18歳で聴力も失い、それでも勉強を続け視力・聴力を失った人として初めて大学に進学し、東京大学の教授になった福島智さんのことが書かれています。福島さんは私と同世代です。これまでに先生の本で私が読んだのは『ぼくの命は言葉とともにある』です。この本には先生が大切にされてきた言葉がたくさん詰まっているのですが、私にとっても懐かしい思い出のある詩が載っているのでも君たちにも紹介しようと思います。詩人は吉野弘。ハルキ文庫の『吉野弘詩集』から引用します。文庫本のレイアウトのままに書くともあまりにも行数が多くなるので、作者には申し訳ないけど少しアレンジします。題は「生命は」です。「いのちは」と読みましょう。

生命は

自分自身だけでは完結できないように つくられているらしい

花も

めしべとおしべが揃っているだけでは 不十分で

虫や風が訪れて めしべとおしべの仲立ちをする

生命は

その中に欠如を抱き それを他者から満たしてもらうのだ

世界は多分 他者の総和

しかし 互いに

欠如を満たすなどとは 知りもせず 知らされもせず

ばらまかれている者同士 無関心でいられる間柄

ときに うとましく思うことさえも許されている間柄

そのように 世界がゆるやかに構成されているのは なぜ？

花が咲いている すぐ近くまで

蛇の姿をした他者が 光をまとって飛んできている

私も あるとき

誰かのための蛇だったろう

あなたも あるとき

私のための風だったかもしれない

詩人は、人は一人では生きられないということを表現しているように思います。君たちの解釈はどうでしょうか。人は一人で生きているのではない。他者とともにある。そして他者とのかかわりはゆるやかでいい。お互いが補い合っていることなどお互いが気づかないでいる、それでいい。いや、それがいい。詩人はそう言っているのではないのでしょうか。最後の四行を初めて読んだ時、ああ、本当にそうだなと思ったのを覚えています。君たちも知らないうちに誰かとかかわっているのでしょうかね。

パスカルは「人間は考える葦である」と言いました。葦は「あし」（英語で reed）と読みます。日本人らしいと思いますが、これ、「あし」という発音が「悪し」に通ずるので反対の「よし（善し）」に変えるのですね。興行などでは「から」とか「する」などは嫌われますから、「おから」を「きらず」、「するめ」を「あたりめ」などと呼びますね。ここで、もう一つ吉野さんの詩で私のお気に入りをご紹介します。

風流譚

葦（ヨシ……善）も
葦（アシ……悪）も
私につけられた二つの名前です
どちらの名前で呼ばれてもハイと答えます
善のさかえる世の中は
悪のはびこる世の中です
私にはよくわかる理屈ですが
人は首を傾げることでしょ

これは大人の詩です。君たちは「善のさかえる世の中は悪のはびこる世の中です」に首を傾げることでしょね。しかしこの詩は、人間というものの、黒か白で割り切ることでできない重厚な、それゆえに豊かな精神を表現しているように思えます。

今週のおすすめ

・泉ゆたか 『横浜コインランドリー』（祥伝社文庫）

様々な悩みを抱える人々が集うコインランドリーが舞台。そこで洗われるのは洗濯物だけでなく、こじれた心。私、NHKのドラマ「しあわせは食べて寝て待て」を観ていたのですが、設定も内容も全く違うにもかかわらず、この本を読みながら何度もこのドラマを思い出していました。ドラマは洗濯ではなく薬膳。扱うものは違いますが、どちらも何と言いますか、再生の物語なのですね、共通するのは。

コインランドリーを経営する新井真奈とひょんなことからアルバイトをするようになった中島茜が、お店を訪れる一癖も二癖もありそうなお客さんの心をほぐしていくという物語です。三十代後半ながら三十代前半にしか見えないという真奈さんが、茜視点ですが魅力的に描かれています。真奈さんに恋をしている男も面白い。茜の恋の予感もアクセントになっていますけど。私はこの類の連作短編集が大好きなので、また紹介します。ちなみに第二弾が出ていましたから、気に入ったらこちらもどうぞ。

BGMは 渡辺美里 の *My Revolution* でした…。